

First Kiss

1

誰を好きになっても、誰とキスしても、その人は特別だった。自分のものにはならないと最初からわかってはいたけれど、それでも、大切な人だった。

手に入れたいなんて、思ったことはない。ただ、誰もが憧れるその人が、たくさんの女の子たちの群れの中から自分を見つけたして、気軽に声をかけてくれる。それが麻里の誇りだった。もう、ずっと昔から。

「ねえ。……山崎さんって、好きな人いるのかなあ」

正月二日の自宅のリビングで、兄の修史にそんなふうになると、修史は読んでいた雑誌を繰っていた手をピタリと止めた。

「え……何？」

「だから、山崎さん。……彼女とかいるのかな」

「彼女……ねえ」

修史は微妙な表情になる。麻里はムツとして、雑誌を取り上げた。

「お兄ちゃんが、知らないわけないでしょ。ちゃんと答えてよ。私、学校の友達に聞かれてるんだから」

麻里は、修史や桂が通う清鳳学園の近くの、香泉女子に通っている。桂はその女子校でもけっこうな人気があるらしく、麻里はよく、手紙やらプレゼントを頼まれるのだ。

坂井修史の妹で、山崎桂の幼なじみ。この麻里の立場は、周囲の友達からは相当うらやましがられている。麻里にしてみれば、ただ面倒事が増えるばかりで、何の得にもならない悩みの種なのだが。

「いるか、いないか……それだけわかれば、みんな落ち着くんだったば。……ね？」

麻里の詰問に、修史は少し考え込むような表情で、ローテーブルの上に頬杖をついた。

「……桂に、直接聞いてみれば？ 今日、午後から来るし」

長年の付き合いで、兄のその口調が、知らないから言えない、という意味合いでないことは麻里にもわかる。……知っているけど、教えるつもりはないということだ。麻里はムッと頬を膨らませた。